

『マナ』と『のら』は駅までの道を歩いてきた。『マナ』の家から駅までは歩いて大体二十分である。『マナ』が先を歩く。『のら』は後ろからついて行く。『マナ』は嫌な予感がし後ろを振り返ると、そこに『のら』の姿はなかった。『のら』は飛び交う蝶を追い掛けて、遙か後方を走り回っていた。『マナ』が近づいて行き、『のら』の『行くぞ』と言うと、『のら』は『どいへ』と言って、まだ走り回っていた。すっかり目的を忘れているらしい。『のら』は蝶が芋虫が大きくなったやつなんだぞ』と『マナ』が言つと、『のら』は固まって動かなくなった。固まった『のら』を摘み上げ、『マナ』は先を急いだ。やっと駅に着いて時間を見たら、四十分もかかってしまっていた。

電車に乗るため『マナ』は切符を二枚買一枚を『のら』に渡した。『のら』は「これ何」と言つて受け取った。『マナ』は「切符、電車に乗るための大切な証明書だからなくすなよ。本当に何もかも記憶を無くしているんだな」と言った。『のら』は切符を風呂敷袋の中に詰め込み、「これで大丈夫」と言つて、風呂敷袋を『マナ』に見せびらかした。改札が開いた。『のら』行くぞ。切符を駅員さんに見せなさい」と『マナ』が言つと、『のら』は慌てて風呂敷袋を広げて切符を探し出した。「あった。あった。背の低い』のら』は、改札の駅員さんを見上げるように切符を差し出した。改札を出た『のら』は、また大切そうに風呂敷の中に切符をしまった。それを見ていた『マナ』は、『のら』にしては妙に几帳面だな、しかしいちいち風呂敷を広げていては、人の迷惑だなと『マナ』は思った。どうやら『のら』は、大切な物を風呂敷の中に入れてしまう習慣があるようである。

